

※ ホームページ等で公表します。(様式 1)

立教 S F R - 院 生 - 報 告

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）大学院生研究2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学研究科 超域文化学専攻 専攻		
研究代表者 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	文学研究科 超域文化学専攻 D5	木下 純平 印	
指導教員	所属・職名	氏 名	
	文学研究科 超域文化学専攻 教授	丸山 浩明 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	トルコ共和国における喫茶の通態性に関する風土学的研究		
研究組織 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	文学研究科 超域文化学専攻 D5	木下 純平	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 199,253 円／(採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、喫茶という習慣をメゾロジー（風土学）の視点から捉えることを通し、世界各地の人々の生活様式がなぜ多様にあるのかの考察を試みるものである。これは地理的であるととともに存在論的な問いである。なぜなら、風土性をともなう喫茶における茶葉や茶道具などのモノは、単に物質的に何であるか、どこに、どれだけあるかという空間的次元のみに還元できるものではなく、人間存在にとって喫茶の道具“として”そこに在るという場所的次元にも同時にあるためである。これは人間と環境との物理的かつ象徴的な相互関係であり、メゾロジーでは通態という概念で捉えられており、本研究はこの通態と風土性という側面から喫茶様式を考察している。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

〔風土学〕 〔喫茶〕 〔通態性〕

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

今年度は、「2014 年度立教 S F R (大学院生研究) 研究経費計画書」において、指導教官との相談の上、研究課題であるトルコ共和国の喫茶の通態性についての風土学的考察における比較対象の一つである、インド共和国ヒンドスタン平原東部における喫茶様式の調査と報告を行った。

はじめに、本研究では喫茶様式を、茶やコーヒーなどを淹れ、飲むという一連の行為と、その際に用いられる材料や道具類の連関であり、その土地の文化や社会との関係性として捉えている。それは“そこ”と“そこにある”ことの地理的な関係と同時に、“そこにある存在”という存在論的な関係であり、風土学において通態から生まれる風土性(意味=おもむき)という視点から捉えられるものである。そして、調査を行ったヒンドスタン平原東部地域の喫茶様式には、通態性や風土性が、土地の文化、社会との関係性として、より明証的に現れていると考えられる。

今年度、日本においては文献調査を進めるとともに、ヒンドスタン平原東部の実地において、人々の生活の中にどのような喫茶様式があるのかという調査を行った。現地調査では、対象地を Uttar Pradesh 州の Varanasi (バラナシ) と West Bengal 州の Kolkata (コルカタ) の 2 都市の繁華街や市場に絞り、聞き取りと観察を行い、店の形態、淹れ方、各道具類の実態調査を行った。調査に際し、淹れ方として煮出し式、蒸らし式、ドリップ式に分類、器として、素材が素焼き、ガラス、紙、プラスチックかに分類し、さらに素焼きの場合は丸みを帯びた「碗型」と底に向けて直線的に細くなる「杯型」に分類した。

まず、ヒンドゥ教の聖地であるバラナシの旧市街における調査においては、チャイを提供する店の場所や顧客層、チャイの作り方とその際に必要となる道具類の供給元の把握につとめた。作り方は全ての店舗において、生乳と茶葉を鍋で煮出しており、複数の店舗でカルダモンや胡椒などの香辛料を加えていた。道具や材料については、店から数百メートル圏内で仕入れることができ、材料の一つの生乳は町の中のビル内で搾乳され、ミルク缶にいれられたものが自転車で配達されていた。道具の一つである素焼きの器は、卸しの業者が町中にあり、リヤカーで配送されており、その器の形状は碗型と杯型が混在していた。このことからバラナシの喫茶様式においては、紅茶以外は遠方から輸送する必要がなく、現地の食体系や乳文化で利用されている材料や道具が利用されていることがわかる。そして、バラナシの巡礼路にそってあるチャイ屋の顧客にはヒンドゥ教徒が多いことから、ヒンドゥ教の浄不浄の価値体系と関係する、素焼きの器やプラスチックのカップなど、使い捨ての道具が全ての店舗で利用されていた。

次に、イギリス植民地時代の中心都市であったコルカタでは、ムスリム地区とヒンドゥ教の聖地であるカーリー寺院のある地区において調査を行った。結果として、道具類、特に器に関しては、カーリー寺院周辺では使い捨ての素焼きの器が主流であり、ムスリムの多い地域ではガラスや陶器など使い回しのできる器の利用が見られた。チャイの作り方は両方の地区において、鍋にミルクと紅茶と砂糖を淹れて煮出すという、バラナシでも見られる作り方であった。しかし、今回の調査の中で 1 軒のみ、地下鉄カーリーガット駅の近くの店においてドリップ式のチャイが売られていた。この淹れ方はバングラデシュやミャンマーと共通する作り方であった。この作り方に対しチャイを入れる際には生乳を利用し、バングラデシュ以東の地域のようにコンデンスミルクを利用していないことから、コルカタの喫茶様式を材料面から見るとインドの喫茶様式に準じていると言える。

研究成果の概要 つづき

以上の現地調査と文献調査から、現在のヒンドスタン平原東部の喫茶様式には、インドの食文化・乳文化との関係性と、イギリス植民地支配の影響があることが見えてくる。

食文化・乳文化と喫茶様式との関係性については、チャイを作る際に香辛料を加え、ヨーグルト屋と同じ生乳が利用されており、チャイ屋でもホットミルクが売られ、沸騰させた際に浮いてくるクリームをチャイに乗せることも行われる。これは現在のインドの喫茶様式が、イギリス植民地時代以前からの食文化・乳文化とつながるものであり、紅茶という 20 世紀以降、イギリスのインド紅茶協会が庶民の生活に広めようとした喫茶が、インドの食文化・乳文化と結びつくことで、紅茶を利用する喫茶が人々の生活に定着したと考えられる。

そして、器については、まず形状はバラナシにおいては碗型と杯型が混在しており、コルカタでは碗型を多く観察できた。次に材質については、乳文化に属するヨーグルト系の販売時に利用されるものと同じ素焼きのものや、素焼きでなければ紙コップやプラスチックカップなど使い捨ての器が、特にヒンドゥ教徒の多い地域で利用されていた。一方、ヒンドゥの浄不浄の観念とは関係のないムスリムの多い地域では、ガラスや陶器など使い回しの器も関係なく使っていた。これは食事の際に陶器などの皿の代わりに、大きな葉が利用されることと同じく、ヒンドゥの浄不浄の観念との関係性があると考えられる。つまり、道具が喫茶様式として通態的なものとなる過程は、その機能的側面（飲むための道具）と社会的側面（浄不浄からの使い捨てである必要性）から考える必要がある。

今年度は、文献調査と現地調査を通して、バラナシとコルカタの喫茶様式の比較を行い、ヒンドスタン平原東部の喫茶様式の共通性と異質性、その形成過程におけるイギリス植民地支配が与えた影響、現地の生活様式や食文化との関係性についての考察を深めることができた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文

なし

②図書

なし

③シンポジウム・公開講演会等の開催

なし

④研究報告書の提出

青柳真智子奨学金の調査報告